

リシユリユー編

首飾りの力ですべての騒動は一件落着した。

ダルタニアンは騎士道精神の理念に基づく学園生活を友人らと共に過ごし、リシユリユーとの愛を育んだ。

事件解決から5年後。

リシユリユーは理事長の職を後任に委ね、

ダルタニアンと共にシュバリ工島を出た。

結婚した二人は、生まれてきた子供のため

リシユリユーの故郷にほど近い土地へと引っ越したのだ。

そこで葡萄の栽培に力を注ぎ、リシユリユーは
広大な田園一帯の領主となった。

——フランスの田園地帯。

金髪の女

「今年の葡萄は豊作だね。」

背の高い男

「そうだな。今年はいいいワインができてそうだ。

これでリシユリユー様も喜ぶぞ。」

金髪の女

「ほら。噂をすればリシユリユー様の登場だよ。」

小太りの老人

「ああやって毎日必ず様子を見にいらっしやる……

まだお若いのにしっかりされた方だ。」

——リシユリユー邸の居間

リシユリユー

「……ふう。」

ダルタニアン

「お疲れのようですね。」

リシユリユー

「ふっふ……」

お前の顔を見たら疲れなど吹っ飛ぶ。」

ダルタニアン

「……ねえ、あなた。」

リシユリユー

「ん？ 何だ？」



ダルタニアン

「あ……ごめんなさい。
別に改めて言うほどのことじゃないんです。
……ただ、理事長の職を辞めて今度は領主……
職を変えても皆を束ねてこんなに慕われて……
私はとてもいい人と結婚したなって思っています。」

リシユリユー

「ははははー！
そんなことが。
私はてっきり違うことを想像していたぞ？」

ダルタニアン

「何をですか？」

リシユリユー

「いいか、ダルタニアン。
男が仕事で忙しいときはこう言うのだ。
『甘える時間がなくなった』とな。」

ダルタニアン

「え……」

リシユリユー

「私はお前が少し拗ねて、
少し寂しそうで、少しわがままを言うところも
可愛いと思うぞ。」

ダルタニアン

「……あら、『少し』がポイントなんですか？」

リシユリユー

「ふっふ……
いや、全力でぶつかってきてもいい。
私はすべてを受け止めてやる。」

ダルタニアン

「相変わらず強気ですね。」

リシユリユー

「当然だ。
……で、お前は私に何を言うのだ？
言わないと言わせるぞ？」

ダルタニアン

「ふっふ、じゃあ……」

——コンコン。

ロシュフォールの声

「リシユリユー様。ロシュフォールです。」

リシユリユー

「……入れ。」

——ボタン。

ロシユフオール 「失礼します。」

リシユリユー 「何の用だ。」

ロシユフオール 「葡萄の収穫を祝うパーティで着用していただく
若君の衣装についてですが。」

リシユリユー 「どうした。」

ロシユフオール 「私がお意地なものをさしおいて、
ダルタニアンが品のない衣装を新しく作ったようです。」

ダルタニアン 「……………」

ロシユフオール 「襟元に大きなフリルが幾つも並ぶなど愚の骨頂。
あれではリシユリユー様のお立場を悪くしかねません。
何故、そのような許可を……………」

リシユリユー 「ロシユフオール。お前らしくないぞ。
決まったことに従え。いいな。」

ロシユフオール 「……………畏まりました。」

リシユリユー 「行っていいぞ。」

ロシユフオール 「では、失礼します。」

——ボタン。

リシユリユー 「……………品がないとは……………ロシユフオールめ。」

ダルタニアン 「ふふっ。私が注文したと思ってああ言ったんですよ。
それに、葬儀のような真っ黒の衣装よりいいと思います。」

リシユリユー 「そっだな。」

……………それにしてもロシユフオールは最近やたらとこの部屋に来る。
私がお前と一緒にいるのを妬いているのか？
……………ふ……………、それはないか。」

ダルタニアン 「……………いえ、ありえるかも」

リシユリユー 「……で、今宵は何をするのだ？」

ダルタニアン 「えっ……？」

リシユリユー 「今日はお前と初めて教会で出会った記念日だ。覚えているか？」

ダルタニアン 「はい。もちろんです。」

リシユリユー 「夫婦でも男と女だ。記念日は大切だぞ。」

ダルタニアン 「はい。」

リシユリユー 「ならば……」

——コンコン。

リシユリユー 「……………」

——コンコン。

ロシユフォールの声 「リシユリユー様。ロシユフォールです。」

リシユリユー 「……………入れ。」

——バタン。

ロシユフォール 「失礼します。」

リシユリユー 「今度は何だ。」

ロシユフォール 「兼ねてから懸案となっております。新種のワインの命名の件でございます。候補の案をいくつかお持ちしました。」

リシユリユー 「今か？」

ロシユフォール 「はい。早い方が良いと思っております。」

リシユリユー 「……………」

ダルタニアン 「……………」



ロシュフォール 「では早速。

こちらの提案書をご覧ください。」

リシュリユー 「ああ。」

ダルタニアン 「……相変わらず凄いな。

沈黙をもものともしない押し強さ……」

リシュリユー

『ラッサンブレ・サリユー』……

『ラ・ヴォリエル』……

……どちらも堅苦しいな。

それにワインの銘柄らしくない。」

ロシュフォール

「そつでございますか。

では再考してお持ち致します。」

リシュリユー

「いや。

今、決めてしまおう。」

ダルタニアン

「えっ……」

ロシュフォール

「今、でございますか？」

リシュリユー

「そつだ。」

リシュリユー

「(小声で) 真夜中に寝室に来ないとも限らんからな。」

ダルタニアン

「(小声で) なるほど……」

リシュリユー

『ラブ・ラビリンズ』はどつだ？

愛に満ち溢れる芳醇な葡萄を連想しないか？

ダルタニアン。」

ダルタニアン

「ラブ・ラブリンズ……

あ、すみません。囁んでしまいました。」

リシュリユー

「はははは。可愛いぞ。」

ロシュフォール

「そつでございましょうか。」

ダルタニアン

「……………」

リシュリユー

「ロシュフォール。」

ロシュフォール 「失礼致しました。」

リシュリユー 「だが、ダルタニアンが噛んでしまったら他の名にしよう。」

ロシュフォール 「では……」

『ラブ・リシュリユー様』はいかがでしょう。」

ダルタニアン 「……………」

ロシュフォール 「愛に満ち溢れるリシュリユー様の意味でございます。」

リシュリユー 「かなり近づいてきたが直接的すぎはしないか？

それに少し甘すぎる名だ。

……………そうだな。

『ラブハンター・リシュリユー』、これはどうだ？」

ロシュフォール 「素晴らしい名でございます。」

リシュリユー 「そうだろう？」

私は名付けには自信がある。」

ダルタニアン 「え……………」

リシュリユー 「『ラブハンター・リシュリユー』

……………なかなか良いな。」

ダルタニアン 「……………」

リシュリユー 「ダルタニアン。

気に入らないのか？」

ダルタニアン 「あ、いえ。

そんなことは……………」

リシュリユー 「……………」

ロシュフォール、もう少し案を出せ。

ダルタニアンと改良を加えたワインだ。

記念になるような銘柄にしたい。

より私らしく、胸にぐっと迫るものを考えよ。」

ロシユフォール 「はい。畏まりました。

では……

『ナイスガイ・リシユリユール様』……

『ダンディ・リシユリユール様』……

『嗚呼・リシユリユール様』……」

リシユリユール

『嗚呼・リシユリユール様』か……

多少は胸に迫ってきたな。

だがもう少しこう、葡萄からワインに生まれ変わる神秘的なセクシーさを求めたい。」

ロシユフォール

「そつでございますね。」

リシユリユール

『アポロン・セレーネ』……

『メルシー・アポロン』……

『ザ・ヘンシン』……

『嗚呼・ヘンシン』……」

ダルタニアン

「……………」

——数時間後。寢室。

ダルタニアン

「……………やっと決まって良かったですね。」

リシユリユール

「だが、窓の外が白くなってきた。

もう夜が明けるのか……」

ダルタニアン

「早く休みましょう。

おやすみなさい。」

リシユリユール

「もう休むのか？」

ダルタニアン

「だって今日もお仕事があるでしょう？」

リシユリユール

「ダルタニアン。先ほど言っただろう。

男が仕事で忙しいときは何と言っただ？」

ダルタニアン

「……………あ……………」

リシユリユール

「……………言わないと私が甘えるぞ？」

ダルタニアン

「もっ……ふっふっ。」

駄目ですよ、甘えるのは私です。」

リシユリユー

「そっか？」

ダルタニアン

「……ねえ、あなた。」

甘える時間がなくなりましたよ？」

リシユリユー

「ふっふ……」

まだ時間はたっぷりとある。」

ダルタニアン

「あ……」

リシユリユー

「……ダルタニアン。」

今日はお前を眠らせないぞ。」

リシユリユー編終わり。